

社会委員会通信

40

2011.1.2

発行：横浜港南台教会 社会委員会

〒234-0054

横浜市港南区港南台 7-8-29

Tel : 045-833-5323 Fax : 045-833-6616

私たち横浜港南台教会は例年、恒例行事のように「寿地区」への越冬支援として衣類、食料、調味料などの物資を献品してきました。しかし、この地域についての関心はあっても、その実態について多くを知る機会はありませんでした。

12月5日、寿地区センターの主事であり、牧師でもある三森妃佐子先生をお招きして、午前は説教、午後は学習会の講師をお願いしたのは、先生が同地区において25年余にわたる献身的な奉仕をされていて、言わば、この地区の「生き字引」的存在であることに鑑みてのことでした。

2千年も前に主イエスが社会の最底辺の貧困層の人々＝病気や飢えに苦しむ人々の中に入り込んで、身も心も癒してくださったその姿を、三森先生の日々の活動の中に見出すことが出来ます。自らを誇らず、自然体で困窮した人々の仲間となって支えているその姿・・・。

大阪の釜ヶ崎、東京の山谷、横浜の寿は日本の三大寄せ場と呼ばれていますが、土木・建設業界の斜陽化や港湾の機械化・自動化によって職場を失ったこと、また、労働者の高齢化によって、「日雇労働者の町」から「社会福祉によって生きる人々の町」へと変貌している状況が、画像を用いて生き生きと分かりやすく報告されました。

寿地区の成立の歴史的な経緯やその変貌と現状の分析、三森先生が扱われた具体的なケースについての生々しい事例報告には、圧倒的な衝撃を受けました。私たちは「共に生きる」「多民族社会」を指向していますが、先ず自分たちの周囲にこのような事実があることを知ること、それから、自ら出来ることを考え、実行に移すことが大切ではないでしょうか。

参加者は33名（男性8名、女性25名）でした。参加者の皆様、ありがとうございました。
(社会委員長：K.T)



いのちの灯消さない
寿地区から問われていること

寿地区センター主事：三森 妃佐子

1.はじめに

ご紹介いただきました寿地区センター主事の三森です。先ほど秋吉先生からお褒めの言葉をいただきましたが、寿地区センターのほとんどの活動は、ボランティアの方々がされています。その中でチームワークと言うか、繋がり合いながら活動しているというのが実態です。

センターと言うと、大きな建物があって、いろいろな部署があると想像されると思いま

すが、実はビルの一室（3LDK）が寿地区センターです。私の活動は寿の地域の中に出て行き、センターと地域の中を行ったり来たりしているので、ボランティアの方に「ノコギリ」のようだとよく言われます。

今日はスライドを観ながらお話をさせていただきます。

2.寄せ場とは

皆さんは「寄せ場」という言葉をお聞きに

なっただけがありますか？ また、寿へ行ったことがある方は？・・・たくさんの方々に驚きました。

寿地区は、「寄せ場」と呼ばれているところ。寄せ場について、一通り説明させていただきます。寄せ場とは、日雇労働者が仕事を探す場所で、通常は、早朝の労働市場として、労働力の売買がなされる路上、及びその周辺を指します。もっと簡単に言えば、屋外で仕事の斡旋をする所です。

規模が大きく、日本の3大寄せ場として、東京の山谷、大阪の釜ヶ崎、横浜の寿があります。

< 寄せ場の歴史 >

「寄せ場の歴史は、今日の日本社会の都市化、あるいは工業化と不可分です。それは寄せ場の歴史が証明するところです。日本経済の成長と表裏をなすとも言えます。1960年代初頭のエネルギー革命と農業政策の転換は、日本の産業構造を大きく変えました。つまり、石炭から石油へのエネルギー転換政策と農業基本法（1961年）による農業の機械化、大型化は、余剰人口の都市集中化をもたらしました。炭鉱閉山に伴い、たくさんの労働者が失業し、職を求めて工場労働者、あるいは港湾労働者として都市、寄せ場へとやって来ました。農村でも、機械化により余剰労働力となった農家の二男、三男は、やはり都市へ出て来ました。しかも、その日から生活出来る寄せ場へ集まって来ました。

以来、各寄せ場とも人口の多少の変動はあるとは言え、日雇労働者の労働市場として機能し、今日に及んでいます。『寄せ場 4』小柳伸顕氏



3. 寿地区について

< 地理の説明 >

寿地区は山下公園、外人墓地、港の見える丘公園、中華街、日本で一番高い70階ランドマークタワー（295.8m）、ベイブリッジ、

官庁街などに囲まれています。特に中華街はJR石川町駅の東側、寿地区は西側に位置しています。まるで繁栄の表と裏を表しているかのような町です。また、あの町は通っちゃいけない町、怖い町、昼間からお酒を飲んでいる人たちがいて、怠け者の町と言われ続けています。偏見と差別にさらされている地域です。

< 寿地区の歴史 >

寿地区の周辺は江戸時代（1597年）まで海でした。埋め立て事業が進み、完成したのは明治初期（1868年頃）。また、出入りしていた船の大半は帆船で、揚荷は石油、雑貨、そして積荷の8割は生糸でした。船から陸へ荷揚げ荷下ろしを行う沖仲士（港湾労働者）という職業が生まれました。

寿地区は横浜港から近いこともあり、周辺は材木店や輸出業者の問屋などが立ち並び、発展しました。けれども、1945年（昭和20年）5月29日の大空襲によって、寿地区は変貌を遂げました。空襲によって灰燼に帰した寿地区は、戦後米軍に接收され、通称カマボコ兵舎が建ち並んでいました。寿地区から伊勢佐木町にわたって、兵舎、モータープール、軽飛行機用滑走路が占拠し、「OFF LIMIT」のマークのもとで日本人を締め出していました。伊勢佐木町には巨大なカマボコ型の建物が突然建ち、偉容を誇っていました。また、横浜公園にあった野球場（今の横浜スタジアム）も接收され、「ゲーリック球場」と称し、アメリカ人が野球をするのを、金網越しに眺める他ありませんでした。

当時、横浜港は米軍の兵站基地としてフルに使われるようになり、大量の軍物資の集積、食料品の揚陸が行われ、労働力の需要が大きくなりました。「横浜に行けば、港に行けば何とか食える」と伝えられ、全国から復員軍人、失業者が大量に集まって来ました。

このため、当時職業安定所があった桜木町野毛周辺には数千人もの労働者が町に溢れて

いました。これらの労働力は、日雇い、臨時職が多く、正規の職業紹介だけでなく、手配師による大量の闇雇用が行われていました。

また、多くの労働者が住むには宿泊施設が極端に少なく、屋台や路上で寝る人が多くいました。そのため、大岡川には水上ホテルと称する宿泊施設も作られましたが、それでもその数はあまりにも少なく、人々は溢れていました。1952年（昭和27年）頃から横浜の接收はかなり強力な働きかけにより、徐々に解除され始めましたが、寿地区を含む埋立地の接收が解除されたのは1955年（昭和30年）でした。接收解除後、地主達は疎開していたため、返された土地を売りに出すようになりました。この頃、坪（3.3㎡）9,000円とか。1956年（昭和31年）第一号の簡易宿泊所「ことぶき荘」が建てられました。また同年、桜木町にあった職業安定所と寄せ場が寿町に移転して来ました。

1959年（昭和34年）「大岡川周辺十二ヶ町美化期成同盟」が結成されました。これは桜木町、野毛周辺のスラム、「カストリ横丁」、「クジラ横丁」桜川スラム等の強制撤去、水上ホテル等の陸上移転がその中身であり、野毛を含む桜木町周辺（当時、桜木町周辺は横浜駅周辺、伊勢佐木町周辺以上の横浜第一の繁華街であった）の環境整備が目的でした。

結果として、この運動は「住民」と行政が一体となり、「美化」運動の帰結として「目ざわり」の存在を排除したものでした。

もう一方で、日本の朝鮮半島の植民地支配による土地収奪と強制連行で日本に連れて来られた人たちが、戦前から、寿地区の横を流れている中村川流域に住んでいました。日本の社会の中では、いかにその個人が有能であっても、日本人の差別意識の故に、会社に就職することは困難でした。自分たちで仕事を興していかなければなりません。そのような状況で、焼け野原になり安く売りに出された土地を、みんなで資金を集め少しずつ買い、その土地に簡易宿泊所（一般にはきわめて低

額で宿泊出来る民間施設のことである。通常、旅館業として営まれているが、主に住所不定の日雇労働者等がそこを常宿として生活する 경우가多く、旅館と言うよりも日割り計算のアパートと言ったほうが近い。素泊まりが通常で、宿泊費は前払いを原則とする)を建て、経営に当たりました。ですから、寿地区のほとんどの宿泊所の経営者は、在日の韓国人・朝鮮人の方々です。

ここが寿町のメインストリートで、ドヤと呼ばれる建物立ち並んでいます。正式名称は簡易宿泊所ですが、通称ヤドの反対でドヤと呼ばれています（以下



簡易宿泊所をドヤと呼ぶ)。

左手の一番高い建物がランドマークタワーです。寿から見えるほど近い距離です。その手前の白い建物は「横浜市ホームレス自立支援施設 はまかせ」。2003年6月に開設され、ホームレス状態にある方に一時的な宿泊場を提供するとともに、生活指導や就労支援などを行い、自立を支援することを目的としています。生活指導員、看護師のほか、ハローワークから2人が出向して就職斡旋に当たっています。利用定員は226名（内、女性枠は20名）で、利用期間は原則30日（最大180日まで延長可能）。居室は4人ないし6人部屋で、集団生活が苦手な人には利用しにくい面も。最上階の7階には常勤就労者が入所し、お金を貯めてアパートを借りる準備をしています。2階の事務所の前が女性用の部屋となっています。主目的は就労支援ですが、施設の一部がシェルターとしても活用されています。神奈川県匡済会が運営を委託されています。

【寄せ場】行かれたことのある方は思い出していただき、一度も行ったことのない方は「えーっ」という感じで見てくださればいいのですが、ここが寿の中心で、自転車が立ち並ん

でいる所は、野宿をしている労働者、または仕事を待つ人たちが焚き火をしていた場所です。いのちの灯がともっていたところです。

【寿労働センター無料職業紹介所】ここは寿町総合労働福祉会館の1階にある日雇労働者のための無料職業紹介所です。(財)神奈川県労働福祉協会が運営しています。日雇い求人(1日だけの仕事)は、朝6時15分から先着順で受け付けています。有期求人(2日以上から30日以内の仕事)は、9時から先着順で受け付けます。

昔は暗い中から仕事を探しに来ていました。このスライドのようにたくさんの方がいましたが、今はほとんど仕事の紹介がない状況ですので、こんなに人は集まっています。

今、仕事がないということをお話しましたが、仕事の紹介は去年1年で12件だけ、22名しか仕事を得ることが出来ませんでした。そのくらい仕事がないのです。探せばあるんじゃないかという声をよく聞きますが、日雇労働者の仕事はほとんど建設業ですので、この不景気の時代には、本当はないのです。

現在、250m四方の中に6,517人が住んでいます。97%が男性。簡易宿泊所は124軒(ビジネスホテルのような)1部屋3畳以上4畳未満67%。部屋数は8,615室。1泊の料金は、平均2,022円。一番安いところは1,000円。最高3,200円。生活保護で家賃分として上限2,200円です。2,100円以上、2,300円未満が61%です。

私が寿に入った頃(1987年)は何百人という人が仕事を求めて来ていましたし、仕事がありました。でも、ここ10数年、様相が変わってきています。寿地区は「日雇労働者の町」というよりは「高齢者の町」「福祉の町」となっていました。



【バリアフリーのドヤの一室】高齢者たちは、生活保護を受けて生活している人たちが大部

分ですが、住宅補助等が上限2,200円出ますので、それ以内で収まる所に泊まっているという状況です。このように、新しいドヤもあれば古いドヤもあります。先ほど高齢者が多いという話をしましたが、車椅子で生活している人たちも多くて、新しく建ったドヤはバリアフリーになっています。バリアフリーですから、トイレも障がい者用のトイレで、ドアも広く、手すりも付いています。そしてエレベーターも付いています。冷暖房もあります。

このように、ここに住んでいる方は車椅子で、ベッドもそれ専用のベッドです。このようなかたちで生活している人たちが寿の中で増えています。そのため、ヘルパーさんがたくさんいます。私が25年前に入った頃は、女性は寿町の中では珍しい存在だったのですが、その後、1990年代には韓国から出稼ぎに来ている女性たちが目立ち始めました。今は女性の多くはヘルパーさんたちです。ヘルパーさんは、女性だけではなく男性も多く、増えています。寿の中に事業所が約7カ所あります。そのニーズは増えています。

昔の寿を知っている方は、「あそこは怖い町」と聞かされたり、そう思っている方も多いと思います。1990年代の初めには、日雇労働者たちはバリバリ働いていたわけで、やはり表現として荒いという言葉が使われるのは当たり前だったのではないかなと思います。子どもの数も非常に多く、1,000人以上いたと聞きます。2畳、3畳の部屋で親子が暮らしていたという時代があったということです。

80年代後半から90年代までは、外国人の労働者が多くいました。6,500人のうちの約1,000人は外国人移住労働者でした。韓国の方が多くいましたし、フィリピンの方、タイの方等、寿の中はいち早く国際化されていました。様々な言語が町中を飛び交い、いろいろな食べ物を町中の店で売っていたという時期がありました。でも、仕事がなくなって国

に帰られた方もいますし、強制的に帰された方もいます。今は寿で生活している人は数十人しかいません。

また、先ほど高齢者の方が増えていると言いましたけれども、1990年代から生活保護の受給者が増えてきました。1994年（昭和59年）には、ここで生活していた約5,600人のうち60歳以上の人は504人でした。2009年度（横浜市健康福祉局生活福祉部寿福祉プラザ2009年11月調査統計）では、3人に2人は60歳（4,170人内男性4,015人：女性155人）。また生活保護受給者は約5,320人です。

このように60歳になってから寿に入ってくる人たちがほとんどです。寿の日雇労働者で高齢になったという人も中にはいますが、私の印象では数的には高齢者の中の3分の1ぐらいだと思います。あとは寿に60歳を過ぎてから入って来たという人がほとんどです。なぜ60歳になって寿に来るんだろうということを皆さんに考えていただきたいと思えますし、後でそのことを含めて皆さんのご意見もお聞きしたいと思います。

私が出会った高齢者は、様々な事情を抱えています。その一人ですが、自宅でクリーニング屋さんをやっていました。年をとってクリーニングの仕事も出来なくなりました。子どもと孫と3世代一緒に暮らしていました。けれども、お連れ合いが先に亡くなり、本人は足が不自由で息子たち家族に迷惑をかけたくないと言って、居難くなって寿へ来ました。

また、ある方は有名な大学を出て外資系の仕事をし、アメリカまで行って仕事をしたのですが、58歳の時にお母様が病気になり、その介護のために仕事を辞めました。お母様が亡くなって、気がついたら、その家は借地権の名義がお母様になっていて、借地権をめぐる裁判を起こしたけれども、結局そこに住むことが出来なくなったということです。そして路上に出て野宿生活をしました。そして

ちょうどパトロールで知り合い福祉事務所に生活相談に行きました。今では年金があるのですが、不足分を生活保護で生活しています。本当に一人ひとり様々な状況を背負って生活しています。



麒麟というお笑いコンビの田村裕さんは『ホームレス中学生』という本を出版して話題になりました。その本には、彼が中学2年生の時にホームレスになった経験談が書かれています。いつものように朝起きていつものように学校に行き、家に帰ってきたら、家の家具に差し押さえの黄色いテープが貼ってありました。兄弟3人で待っていたら、お父さんが帰って来て「あなた方は今日から各自一人ひとり生きていてください」という宣言をして、「家族解散！」と言ったのです。中学校などに呼ばれた時、その話をするちょっと本人たちにきついなと思うのですが、私たちにはまさかの人生があるということです。

これは田村少年だけではありません。先ほどお話した方は横浜の方なので、寿町に対して偏見を持っていましたし、差別していて、「あいつらは」と思っていたそうです。その地区に自分が来るとは全く思わなかった、と言っていました。そのようにまさかの人生があると思います。

私たちは事故に遭ったりもします。磯子のアパートで生活していた86歳の方ですけれども、火事に遭って自分は火元ではなかったのですが、福祉事務所に相談に行ったら、「あなたは寿のドヤに住むしかありません」と言われたとか。また、結核で入院していて退院したら、どこにも住む所がなくて寿町に来たとか、それぞれ本当に一人ひとり違う状況で寿に来ています。

また、精神に障がいを持っている人も多いですし、身体に障がいを持っている人も多くいます。障がいを持っている人たちが、なぜ寿に来ざるを得ないのか？ やはり日本は社

会問題というか、この社会が抱えているひずみが寿に集められているのではないかと思います。

障がい者の中にはアルコール依存症の人も多くいます。寿と言えば、昼間から酒を飲んで・・・という印象が強いかもしれませんが、寿の中で依存症になった人は少数で、ほとんどが寿の外で依存症になった人たちです。外で依存症になった人たちが何で寿に？と思われるかもしれません。先日の横浜地区牧師会で秋吉先生からも、「地域の中でもそういう悩みを持っている方がいるんですよ」というお話を聞きました。地域の中で、依存症の方に対して「あそこの人、依存症なんだって、酒ばかり飲んでて・・・」という偏見のまなざしで見られることが多いのではないかと思います。そうすると、自然と居づらくなるのではないのでしょうか。また、依存症になると会社の仕事もなかなか出来ませんから、会社を辞める。会社を辞めるということは、生活費がないわけで、生活費がないということは、家族が生活していけない。それで寿町へ来るを得ないということがあると思います。今、寿の中にアルコール依存症の回復施設がたくさん出来て、寿はそういう医療や福祉の町になっています。ある医者が「寿へ依存症を治すために来ているような気がする」と言っていました。

また、若い女性ですが、小さい時から施設に預けられ、そこで育ちました。里親に預けられたこともあります。関係がうまくいかず、施設に戻りました。施設は18歳(場合によっては20歳)までしかいることができません。施設を出た後は、精神科の入退院を繰り返し、行き場を失い寿へ。今も入退院を繰り返していますが、寿で何とか生活しています。福祉事務所に行くと、施設に入るように勧められました。でも、本人は施設に行くよりホームレスでいいと。しかし、さすがホームレスをされるのも・・・というところで、

寿で生活しています。



【野宿生活者の状況】

新しい簡易宿泊所がたくさん出来て、部屋数だけは8,000を超えるのですが、住んでいる人は6,500人です。2,000室が空いているわけですが、ここにも住めない人たちがいます。その人たちは路上に出ざるを得ないわけです。仕事がないということは、皆さんも自分が生活出来なくなったらどうなるか、お考えいただくと分かると思います。お金がないということですから、食べることも出来ませんし、住む所もありません。

その中で、私の出会った青年は日産に勤めていました。日産の工場が閉鎖されたと同時に寮からも出され即路上に出て来る、ということがありました。そういう人たちは寿町に住むことも出来ず、路上で生活を強いられます。

【関内マリナード地下街】ここは関内の北口とマリナード地下街に行く所で、段ボールハウスを作って生活しています。今、ここも追い出されるということで、私たちはどのように取り組んでいけばよいかが課題になっています。

完全失業率は現在5.1%とされていますが、この中には野宿者は数えられていません。入れたとしたら10%を超えるのではないかとされています。

3月26日に厚生労働省が野宿者の実態調査をしました。全国で12,253人、神奈川県では1,755人という数字が出ました。この数自体は減っています。この調査の方法がどういう方法かと言うと、目視調査です。目で見て、野宿しているに違いないと思った数で、段ボールを抱えていたとか、そういう人を見て数えていくのだそうです。横浜市の場合は、そのための調査をする人たちがいて、夜回って調査をしているので、実数に近いかもしれませんが、なぜこのように数字として減ってい

るかと言うと、いろいろな宿泊所が出来たからです。

2009年から10年にかけて無料低額宿泊所が出来ました(私たちは「無低」と言っています)でも、そこは本当に狭く、一時的な生活の場でしかありません。一生そこで人間として生活し、仕事を得て生きていくというのではなく、ただ泊めておくという所がどんどん増えています。「貧困ビジネス」という言葉をニュース報道でお聞きになっているかと思いますが、2009年6月末時点で全国439施設に14,089人が入所し、92%が生活保護受給者。ですから、数的には減っても、本当の意味でホームレスはもっと数が増えていると思います。

「ホームレス」という言葉ですが、国際的な定義も「人たるにふさわしい適切な住まいに住む居住の権利を脅かされている状態を指す」ということからすれば、一時宿泊所・カプセルホテル・簡易宿泊所に泊まっている人もそうだとと言えますし、建設現場の飯場とか、災害に遭った時の仮設住宅とか、知人の家を転々としているとか、インターネットのカフェ等に宿泊している人たちも、そういう状態だと思います。それらの人々も加えれば、数は10万人から100万人に増えるのではないかとされています。でも、その人たちの8割は仕事をしたいという思いを持っています。

また、生活保護について説明します。生活保護法という法律が日本では憲法25条に定められていて、「国民が健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と、言葉としてありますが、生活保護を受けるのは、壁が非常に高かったです。でも最近は、とにかく生活保護にして生活を安定させようということで、受けやすくなっています。「私たち寿の仲間が生活保護申請を月日にやります」と言う、30人、多い時には80人以上が希望し、列を組んで生活保護の申請に行

ったことがあります。そういうかたちで受けやすくなってはいますが、その後のケアは政策として全くありません。これは早く解決されなければならない課題だと思います。

失業率状態については、特に若者の失業率が非常に高く、15歳から19歳までは9%台、20歳から24歳までも9.0%です。フリーターという言葉はどう使うかということもあるのですが、統計としては15歳から24歳は87万人、25歳から34歳では91万人、若者で178万人の人たちが仕事のない状態だということが、今の日本社会の現実として取り上げられています。

寿でも若者たちが増えています。全くと言っていいほど仕事がないということもありますが、ギャンブル依存症の人たちがいます。薬物依存症もいます。なぜ若者たちがギャンブルに走るのかをいろいろ考えるのですが、それしか楽しみがないということもあるでしょうが、社会環境の問題なのか、教育問題なのか、いろいろと考えさせられています。

パチンコ屋さんの宣伝等を見ても、「あれでは行くよね」という感じです。「冬ソナ」が出て来たり、マンガのキャラクターがいつも自分を呼んでいるような、また北斗の拳とか。そういう傾向を助長している社会の雰囲気があるのではないかと感じます。

ギャンブル依存症の人たちのための回復施設が横浜にも増えています。

4. 襲撃



1983年に何があったか思い出していたのですが、横浜で中学生の殺傷事件がありました。横浜の本当に身近な中学校の生徒たちが山下公園で一人の野宿をしている人を襲撃しました。その襲撃に遭った方は青森県出身の須藤さんという方で、青森で菓子職人をやっていたそうですが、お連れ合いが亡くなって生き甲斐を失い、都会に出て仕事

をしようと思って上京しました。とにかくその日に行ってすぐ仕事に就ける所という、寿町とか山谷です。そこで日雇労働者として長く働いていましたが、56歳の時に体調を崩して日雇労働も出来なくなって山下公園で生活していました。その須藤さんが、中学生たちに暴行を受けて殺されてしまいました。殺され方が非常に残酷でした。ゴミ箱に須藤さんを入れて、そのゴミを俺たちが片付けるといふ正義感に立ったものでした。警察に捕まって、「どうしてやったのか？」という問いに、「面白かった」「骨がポキッと折れるのが気持ちよかった」「なぜ逮捕されるのか分からない」「俺たちは大人が思っていることをやったんだ」と答えたそうです。また、その街の商店街には「子供たちは当たり前のことをしたんだ」と、須藤さんの襲撃に対して賛成した大人もいたそうです。



そのことがきっかけとなって襲撃がなくなったかと言うと、その後も、今も続いています。すべての襲撃に対して怒りを感じるのですが、その中でも特に衝撃を受けた襲撃事件を紹介させていただきます。

2005年10月、兵庫県姫路市の雨堤誠さん(60歳)は足が不自由で仕事が出来ないために、西夢前町の夢前橋下で野宿をしていました。犯人たちは特大のビール瓶にガソリンを入れて作った火炎瓶を投げて雨堤さんを殺しました。彼らは15歳から18歳の少年たちで、そのリーダー格の少年は、3月の卒業式で答辞を読んだ生徒でした。答辞の中身は、「人としての思いやりを見失わず、凜とした姿で生きていくことが必要だと思います。立派な答辞だと思います。学校では良い子だったのですが、外でそのようなことをしていたのです。一人で襲撃することはほとんどなく、仲間で行ったということで、非常に衝撃的なニュースでした。

2006年の11月にも愛知県岡崎市で野宿し

ている人たちに連続殺傷事件が起こりました。住所不定の無職の花岡美代子さん(69歳)で、死因は失血死。頭や顔、上半身を鈍器で激しく殴られていたということです。犯人は若い青年だったのですが、お金が欲しかったために泥棒したと言うのです。野宿をしている人から泥棒する行為、神経が信じられません。それも69歳の女性からお金を奪うという事件です。

2010年の9月18日、千代田区の神田公園で中学3年生がホームレスの人に熱湯をかけた事件は皆さんの記憶に新しいと思います。そのホームレスの方は聴覚障がいがあった方で、よく公園を掃除していたそうです。この14歳の少年は、その方に石を投げたり熱湯をかけました。その中学生が何を言ったかと言うと、「石を投げるだけで止めておけばよかった」。これもまた衝撃的なニュースでした。

野宿をしている人たちが、なぜそういう襲撃に遭わなければならないかと言うと、今日の礼拝でもお話させていただきましたが、私たちの生活の中で「野宿をしている人は怠け者」という意識がまだ強いからではないかと思えます。この教会もそうだと思いますし、道路もそうですし、いろいろな建物がその人たちに依らなければならなかったし、私たちも自分一人で生きているのではなくて、みんなのいろいろな力によってこの生活が成り立っていると思います。にもかかわらず、そのことがなかなか分からないのではないかと思います。

ある方が、人権研修で招かれて、野宿生活者についてお話をするそうです。しかし、話しても話しても分からない、通じないということです。確かに今、「人権」ということで学校とか広報等で取り上げられてはいますが、やはり差別、偏見、襲撃はなくなりません。言葉ではないのではないかと思います。人の命を大切にしていこうということがどういふこと

なのか、頭では分かっている、具体的に私たちの生活の場ではなかなかうまくいっていない。子どもたちの社会では、いじめが頻繁に起こっていますし、止みません。寿にいて一つだけ分かったことは、「現場に触れる、他者と出会うこと」こそが、人が育ちあうということなのです。

今、子どもたちが襲撃をすると言いましたが、東京都の追い出しもそうです。行政とか日本全体が野宿者を追い出しているということが、知らず知らずのうちに子どもたちの中にも反映されているのではないかと思います。ある親は、野宿をしている人たちの段ボールハウスを見ながら、「勉強しないとああいうふうになるよ」と必ず言うそうです。「あの人たちは怠け者だから」と、子どもにそういう教育をしている。何気ない会話だと思っんですけど、それが子どもの差別感を育てているのではないかと思います。

私たちはパトロールをしています。夜10時から回るグループと9時から回るグループがあります。驚くことに、そんな遅い時間に子どもたちが公園でたむろしています。昔は8時になったらとか、5時になったら「もう家に帰りなさい」と言われたと思うのですが、そういう子どもたちがいるのです。その子たちの中には、塾の帰りで、塾が終わるのが8時頃ということもあるそうです。なかなか家に寄りつかない子どももいるとか。その子ども自身、やはり居場所がないのではないかと、つくづく考えさせられます。

先ほど愛知県岡崎市や東京都の野宿をしている人たちの襲撃の話をしました。横浜でも多くあります。特に鶴見では頻繁に起こっています。その中で野宿をしているおじさんが、「あの子たち、かわいそうだよ。行き場がないんだよ」と言うのです。その子どもたちは、よくコンビニの前でたむろしている

のだそうです。地域の人が「あそこで、どここの学校の生徒がたむろしていますよ」と学校に電話すると、教師が慌てて駆けつけ、「解散！」というかたちで解散させる。ところが解散させても家に帰るのではなく、今度は公園に集まる。そうすると、また地域住民から「お宅の学校の・・・」という感じで、また散らされる。今度はどこへ行くかと言うと、河川敷に行って自分たちの鬱憤を晴らす。

学生たちとも話をしますが、この就職先がない時代、とにかく自分が就職しなければならない、相手を蹴落としてでも就職しなければならない。確かに食べなければ私たちは生きていけません。生きていくためには仕事をしなければなりません。自分が良い大学に入ったから良い仕事に就けるという幻想が壊れてきたということがあります。にもかかわらず、「塾に行って勉強して、ちゃんとした学校に入れ」と小・中学生は常に言われています。「イライラした」「学校の先生に怒られた」「お母さんに怒られた」「お父さんに怒られた」。そういうストレス状態の中で、その鬱憤を晴らすために野宿者を襲撃した、ということがあります。



今、子どものことも話し、大人のことも話しましたが、日本社会全体がなんかギスギスしているストレス状態の中で、人が人として大事にされていない社会だということが言えると思いますし、それを実感しています。

【寿地区高齢者ふれあいホーム】今度は寿の地区の取り組みをお話させていただきます。これは「木楽な家」という寿地区高齢者ふれあいホームです。60歳以上の方が憩う場として建てたものです。間口の狭い所ですが3階建てで、2階が囲碁・将棋の間、テレビを見たりする娯楽の間。3階が多目的ホールです。ここで教会関係の方々が昼食会をしてくださっています。教会としてやっているグループもありますし、教会として参加は出来ないけ

れども個人で参加したいということで来ている方々も多く、毎週月曜日と、第1・3・5木曜日に昼食会をしています。大体50~60食用意しますが、入りきれないということもあって、それが私たちの出来る範囲かな、というふうに思います。

最初、ここを建てて昼食会をやるとした時、とにかくみんな「食べた後、ゆっくりしたいね」ということだったのですが、食べたらすぐ代わらなければ次の人が食べられないという感じで、慌しい状況です。毎月第1と第3はサロンということでカラオケと輪投げをしています。この前は水族館に行きました。いろいろなイベントも企画しています。建設に当たりましては、教会関係の方々にも建物の建設資金を集めていただきました。ありがとうございます。



この写真はヘルパーさんが車椅子を押して歩いているところです。これは先ほど言ったアルコール依存症の人たちの「寿アルクセンター」です。病院に行っても、アルコール依存症は治る病気ではありません。病院で調べると、体質的になりやすいかが分かるそうですが、どんなにたくさん飲んでも、ならない人もいます。依存症の人が言っていました、やはりアルコールに対して弱い体質を持っているようです。でも、病院に行って薬を飲んで治すのではなくて、仲間同士で助け合って、今日一日飲まない生活を続けていこうということでやっています。

普通の作業所は週休2日で土・日が休みですが、ここは365日、毎日あります。そして毎日自助グループのミーティングに通っています。回復した人たちは、1滴でも飲んでしまうと、また元に戻ってしまうというのがアルコール依存症という病気だそうです。回復した人たちは先ほどの「木楽な家」の管理人をしたり、いろいろな寿の活動に携わったり、また仕事を心得て寿の外で生活をしています。

【炊き出し】炊き出しをしている様子をスライドでざーっと流します。みんなで作ってみんなで食べます。教会関係の方々に来て、寿に住んでいる人とか、野宿している人とか、一緒に炊き出しをやっています。いろいろな学校の生徒たち、中・高生の子どもたちも来て炊き出しに参加しています。いろいろな野菜を入れますが、必ず入れるのは、大根、人参、ジャガイモ、葉物、肉、長ネギ。こだわりのある方がいて、ネギの値がどんなに高い時でも必ず入れます。このように雑炊を作っています。第1金曜日はカレー雑炊で、非常に人気があります。米は大体1回に20kg使います。初めは町内会館の中で作っていましたが、数回やるうちに外に作業台を作って、町に行く人たちも参加出来るようにしました。このように並んで寿公園で食べています。

【越冬】「越冬」ということでは、一人の餓死・凍死・病死も出さないで春を迎える活動ということでやっています。今年も12月の29日から1月3日まで炊き出し、年越しそば、餅つき、パトロール、医療生活相談。このほかに法律相談、労働相談が加わってやっています。ここは中華街ですが、このように夜回りをしています。ここはマリナード。このようにテントを張って、自分たちでやっています。

【バザー】ボランティアの方々とお話しの方はバザーのお話を聞いたことがあると思いますが、毎月第1土曜日にやっています(生活保護支給日の週ということで第2土曜日になることもあります)。皆さんからもたくさん支援していただいています。ズボン1本200円とか、上着100円とかで売っています。このように寿公園にシートを敷いて、値付けはなく、目安を決めてやり取りでやっています。食器等も売っています。買わないで1日中ずっと話し込んでいるお客さんもいます。毎月楽しみにしている人もいます。この左手の男性は寿の最年長者で93歳でしたが、今病院に入

院されています。三色弁当は 200 円で売りますが、とっても人気があり、バザーで買わない人でも、これだけが楽しみで並んでいる人もいます。

【ことぶき福祉作業所】ここは「ことぶき福祉作業所」です。私の前任者の野々村牧師がここで働いていました。ここは身体に障がいを持っている人たちの作業所です。内職仕事为主ですが、不景気で内職もなくなり、100 円ショップで売っているクリップを袋詰めする仕事しかないという感じで、非常に困っています。ここは高齢化ということで、作業所というよりもデイ・ケアのようなかたちになっています。これは今後の課題だと思います。

【木楽な家】ここは先ほどの「木楽な家」で、このようにクリスマス会をやって



います。屋食会ですね。寿には高齢者がたくさんいるということで、老人クラブの方々とお花見に森林公園に行って輪投げをされていて、子どもたちも寄って来ました。

【高齢者との交流】このように年に 1 回、中高生ゼミを行っています。高校生たち、教会学校の生徒たちは寿に来て炊き出しに参加し、野菜の切り込みを終わり、そして「木楽な家」で高齢者の方々と輪投げをし、交流しているところです。

【国際的な有名人】この方を見た人はいますか？ この方は 71 歳か 72 歳で、このような帽子にいろいろな飾りをつけ、テレビにも結構出ていて、フランスの芸術祭にも参加したそうです。寿のドヤで生活しています。この衣類はバザーで買ったものです。

5. 日本基督教団神奈川教区の寿地区への関わり
神奈川教区の取り組みですけれども、1983 年に教区総会で「教区宣教の活動プロジェク

ト推進に関する件」が提案されて社会委員会寿地区問題小委員会が設置されました。1987 年に私も加わりました。その時、寿の中でキリスト教に対して「すぐ出て行くんじゃないか」キリスト教はすぐ自分たちの伝道と言って、それが思うように進まなければすぐやめるんだよね」と批判されたりもしました。私たちはそういうかたちでなく、寿の課題と一緒に担っていかうということで 1987 年に入った時に、寿の中で何の課題があるのかという勉強会をしました。

その時はすでに老人クラブとか、学童保育、身体障がい者の作業所、アルコール依存症グループなどもありました。ちょうど私たちがに入った頃は、精神障がい者の居場所、行き場がないということで、なんとか居場所が出来ないものかと寿で活動している人たちと話し合いました。その話し合いが進み、精神障がい者のデイ・ケアが提案されました。私たちボランティア 5 名ぐらいでしたけれど、勉強会を始めました。

そして、デイ・ケアを週 3 日やっている中で、やはり毎日継続した支援活動が必要だということで、「市民の会」を立ち上げました。それが今「ろばの家」として独立したかたちです。牧師やいろいろな教会関係の方々がボランティアとして参加しています。

寿地区センターは本当にビルの 1 室で、活動はすべて寿の外で行っています。炊き出し、夜回り、そして「木楽な家」、作業所関係等、寿の地区内で活動しています。寿地区センター独自でやっているのは、バザー、青年ゼミ、講演会等です。現在、ボランティアの登録は 100 名近いのですが、100 名が毎回来ているわけではありません。自分の出来ることを自分の出来るところで参加しています。例えば裾上げが得意という方は、裾上げのボランティアをします。1 本につき 100 円なのですがそのお金は「木楽な家」の支援ということになります。個人的にはそういうかたちとか、

昼食会、炊き出しをやっていきます。

だんだん高齢者が増えてきたということで、寿のボランティアの課題も高齢化だという話もありますが、60歳になって初めて寿にボランティアをしに来た方もいらっしゃいます。年齢に関係なく、自分たちに出来ることをやるということです。最高年齢は94歳の方で、以前のように寿に来ることが出来ないので、ご自分の家で畑をしています。採れた野菜を炊き出しのために提供してくださっています。もちろん取りに伺います。つい先だってまではズボンの裾上げもしていました。そのように、それぞれが自分の出来るかたちでやっています。

寿地区活動委員会は神奈川教区の特設委員会に位置づけられています。本当に神奈川県内の教会の方々、そして個人としても多くの方々に支えられて成り立っている活動だと思っています。



5. おわりに

私自身寿にいて、この日本社会はちょっとでもはみ出してしまうと生き難い社会だと思っています。本来は、自分が生まれた所、自分はこういう所で生活していきたいと思う所で生きていければいいのだと思います。けれども、どうしても何かしらがあって、寿に来ているのだと思います。

私たちは、身近なところで自分の家族、地

域の人たち、早く言えばこの教会に集っている高齢の方々のそういう関係とか、血縁ではなくて縁を結び結縁という新しい関わり方が必要ではないかと思います。寿は昔よりも活気がない、高齢者の町で活気がないと言われることもありますが、寿はそれでもなおパワーを持っている、エネルギーを持っている地域だと思います。

今までお話してきましたが、寿には高齢者、障がい者、アルコール依存症の人たちもいて、町を歩けば、大きい声で怒鳴っている人もいます。でも、そこで受け入れられています。そこで生活しています。そこでしか、という言葉を使えばそうかもしれませんが、寿がなかったらどうなんだろうと思うこともしばしばです。そういう意味では、寿は誰でも受け入れる包容力のある町ではないかと思っています。命は神から与えられたかけがえのない賜物です。いのちの灯を決して消してはならないと思います。そのために、皆さんと一緒に歩んでまいりたいと思います。

今日はどうもありがとうございました。今朝お話をさせていただきましたが、私もイエスの生き方にこだわり生きていきたいと思っています。早口でお話をさせていただきましたが、ご自分たちの生活と照らし合わせて、こういうところはどうかとか、皆さんから質問を受けたいと思います。



社会委員会からのお知らせ

寿越冬支援、募金へのご協力に心から感謝申し上げます。

『いのちの灯ともす 寿地区センター10年の講演記録集』（寿地区センター講演記録集編集委員会〔編〕）を1,200円（頒価1,500円）で販売しております。どうぞお買い求め下さい。

社会委員会へのご意見や学習会で取り上げてほしいテーマがありましたら、社会委員にお知らせ下さい。